

Newsletter

August 2015

<http://www.aack.or.jp>

目次	
就任挨拶：玄冬の AACK 松沢哲郎 ……………1	第 33 回雲南懇話会(2015 年 6 月 27 日開催)、 その講演概要 前田栄三、山岸久雄、安仁屋政武 ……………14
松尾稔さん表敬訪問記 ……………4	図書紹介 寒冷の系譜 (北大山の会発行) 横山宏太郎 ……………16
松尾さん偲び／1969 年ブータン隊を語る ……………6	AACK ニュース ……………17
度量と明るさ 米本昌平 ……………11	会員動向 ……………18
ブータン 1969 とネパールの再訪 田中達吉 ……………11	編集後記 ……………18

就任挨拶：玄冬の AACK

松沢哲郎

京都大学学士山岳会 AACK の第 14 代会長になりました。この機会に会員各位に一言ご挨拶申し上げます。

本年は、1865 年 7 月 14 日にエドワード・ウィンパーらがマッターホルンに登頂して 150 年になります。京都大学の歴史を紐解くと、1915 年に学生が教員に引率されて北アルプス登山に行き山岳部を結成した、という記載があります。したがって今年、京大の山登りが始まってちょうど 100 年の節目の年です。

私事を申し上げて恐縮ですが、1969 年(昭和 44 年)に京都大学に入学しました。学生紛争で東大入試の無かった年です。都立両国高校(3 中)の出身ですが、ほかにも日比谷(1 中)、立川(2 中)、戸山(4 中)、西(11 中)など、東京府立中学の伝統をひく、当時の受験校である都立のナンバースクールの出身者がそろっていました。

京大山岳部の入部者には 2 通りのパターンがありました。同回生で山岳部リーダーを務める



ことになる高木真一は戸山高校の出身です。高校時代から山岳部で山登りをし、京大山岳部に入りたくて京大に来ました。たとえ東大の受験があっても必ず京大に来たはず。根っからの京大山岳部志向です。わたくしは、高校でこそ山岳部でしたが、京大に行きたいと思ったことは一度もありませんでした。何が何でも東大

というわけではなく、それが家から通える最も近い国立大学だったからです。授業料が年間1万2千円の時代です。手っ取り早く親孝行するには公立の学校に行き、最寄りの国立大学に行くのがよい。縁あって京都に来たのですが、大学が封鎖されて行くところが無かった。「しかたがない、京大にも山岳部くらいあるだろう」と思って部室（ルーム）を訪ねました。

今西錦司、桑原武夫、西堀栄三郎らの先輩方とお目にかかって直接に言葉を交わすことのできた最後の世代です。誕生がちょうど半世紀ほど離れています。京大に関心は無く、京大の山登りの伝統にも無知でしたから、こうした方々のお名前は当時まったく存じ上げませんでした。「学部はどちらですか」「山岳部です」というような暮らしが始まるのですが、いちおう文学部の哲学科で哲学を志望しました。せっかく京都に行くのだから、高校の授業で習った「西田哲学でも学ぶのが良いだろう」という18歳の少年の単純な発想です。ちなみに、高校時代はひたすら受験勉強に勤しんでいたの、哲学書などは一冊も読んだことがありません。

「遭難から4年目の2回生」というめぐり合わせです。1967年春の日高ペテガリの高山さんの遭難、さらに4年前の穂高滝谷の加納さんの遭難は、いずれも2回生のときでした。二度あることは三度ある。自分たちは遭難から4年目を迎えて2回生になることを常に意識しつつ、すっかり山に夢中になっていました。11月の滝谷を下から遡行、11月のジャンダルム飛騨尾根、3月の魚沼三山縦走、夏の黒部川半月沢初遡行、そうした延長に1973年のヤルンカンがあります。当時22歳、留年を決めて参加しました。

松田・上田のヤルンカン初登頂と直後の松田さんの遭難のあと、高木と2人でカラコルムのシスパーレ峰を試登して日本に戻りました。帰国と同時に受け取ったのが8月の北俣での粟屋君の遭難の報でした。そして山岳部が山行を再開したばかりの11月に槍ヶ岳の中ノ沢の雪崩遭難がありました。5名が亡くなりました。その隊の最上級生でしたから、実質的な責任があります。テント地が雪崩にあったわけですから、設営場所の判断を誤ったことは自明です。自らの過ちで多くの岳友を死なせてしまいました。そのとき、高木と帰国後2人で立案した翌

1974年カラコルム遠征の申請がちょうど提出されていました。K12の許可が下り、高木は行く決意をし、伊藤君と2人で初登頂して還ってきませんでした。

1973年5月のヤルンカンから翌年9月のK12まで、二つの初登頂と4つの遭難がありました。その間の1974年5月に、ヤルンカン隊員の富田さんと浅野さんが奥美濃の山道で自動車が転落して亡くなりました。わずか1年4ヶ月ほどのあいだに11人の山の友人を立て続けに失ったこととなります。多くが20歳代で、最年少の佐伯秀夫くんは18歳です。

わたくしの京大山岳部時代を振り返ると同様に、京大士山岳会の歴史を自分なりの視点で振り返ってみたいと思います。1931年5月24日に、ヒマラヤ登山をめざす団体として結成されました。今年で創立84年目を迎えます。中国の先哲は人間の一生を四季になぞらえて四期に分けました。青春、朱夏、白秋、玄冬です。京大士山岳会の歩みを約20年ごとに刻んで振り返ってみます。

京大士山岳会という法人の青春は、1931年の創立からの約20年間ではないでしょうか。1938年の白頭山遠征、大興安嶺、カブルへの遠征も計画されました。着実に歩み始めた時期ですが戦争で中断を余儀なくされました。

1952年にAACKが再建され朱夏といえる次の約20年間が始まります。嚆矢は最初のヒマラヤ遠征でしょう。1952年に、日本山岳会へ計画委譲したのですが、今西らのマナスル試登がありました。京大士山岳会が主催ないし関与した登山・探検としては、1953年アンナプルナ、1955年のカラコルム探検、1958年チョゴリザ、1960年ノシャック、1962年のサルトロカンリ、同じ1962年のインドラサン（京大山岳部）、1964年のアンナプルナ南峰（ガネッシュ、京大山岳部）の初登頂に続きます。その延長として1967年に未踏のヤルンカン8505mを樋口・松田が試登しました。つまり7000m峰の初登頂の先に、8500m峰の初登頂という高い目標を掲げました。登りつめたという感があります。

白秋の始まりは、1973年のヤルンカンと1974年のK12でしょう。どちらも初登頂とは言いながら、登頂後の遭難に続く苦い結末です。それは同時に京大山岳部の1973年の北俣

と槍の連続した二つの遭難以降の時代ともいえます。物事が暗転した。そこから始まる時代です。小規模の遠征隊がいくつか出ましたが、一方で京大山岳部の劔岳赤谷尾根の遭難もありました。やがて、1982年カンペンチン、1985年ナムナニ（同志社と中国との合同）、1985年マサコン（京大山岳部）、1988年コンロン山脈6903m峰の初登頂、さらに1989年ムズターグアタと1990年シシャパンマという既登峰の登頂成功がありました。しかし1991年1月雲南省のメイリシュエシヤン（カワカブ）の雪崩遭難で、日中合同隊17名が亡くなりました。暗転して始まった時代の最後に、再度の暗転となりました。

白秋が終わって玄冬を迎えます。時期で言えば1991年のメイリの遭難以降の時期です。

1996年のメイリへの再度の試みはありましたが登頂はなりません。1998年7月には明永氷河上に遺体・遺品が現れました。遺体捜索・遺品回収は今に続きます。来年早々、メイリシュエシヤンの遭難から25年目を迎えます。この四半世紀、京大学士山岳会としては目だった登山活動は何もしていません。ヒマラヤの初登頂をめざすという意味では、会の使命は果たしたともいえるでしょう。

京大学士山岳会の青春を担ってきた今西・桑原・西堀らの人々は全員がすでに退場しました。会の朱夏を担った当時若手の登山家が今では全員80歳台です。この方々がぼろりぼろりと櫛の歯が抜けるように去っていくでしょう。かくいうわたくしも、前会長の松林さんと同様に1950年生まれです。還暦を過ぎ定年退職を迎えようとしています。つまり会の白秋の登場人物も、徐々に後景に引いていきます。今に続く玄冬の時代も四半世紀を越えました。以上が、経緯を追ったうえでの法人の現状認識です。

では、京大学士山岳会の命脈はもはや尽きていて、解散する、あるいは立ち枯れば良いのでしょうか。そうではないと思います。松林前会長のもと、理事・特任副会長という新設の職責をいただいて、京大学士山岳会の将来を考えました。このたび会長職を引き受けるにあたり、京大学士山岳会の役割が三つあると考えています。過去と、現在と、将来にかかわる課題です。

第一は、アーカイブの整備です。京大学士山

岳会の登山のユニークな特徴は、つねに学術に関わる活動をしてきたことと、その記録を報告書や映像記録として遺してきたことではないでしょうか。先人の遺した膨大な記録があります。まず手始めに、ホームページの整備に着手しました。ぜひ一度クリックしてみてください。<http://www.aack.info/>

冒頭に英語のサイトが現れるようにしてあります。日本語を見るにはクリックが必要です。国際的な発信をめざしているからです。AACKを旗揚げしたとき今西さんは29歳でした。彼らの世代に始まって多くの人がバトンを引き継ぐようにして遺してきた「パイオニワワークの足跡」が京大にあります。参加者の多くが20歳代ないし30歳代に成し遂げた、他に類例のないパイオニアワークです。それを後世に、かつ世界に向けて発信していきたい。映像等を駆使して、過去を現代によみがえらせます。それは、じつはかけがえの無い、科学的にもすばらしい試みになるでしょう。たとえば50年という時間において比較することでヒマラヤの氷河の消長を検証できます。プータンの文化の変容を、60年前—30年前—今、というように辿ることが可能です。新しい、だれもまだ手を付けていない学問の領域が、過去をアーカイブすることから構想できるのではないのでしょうか。

第二は、現在与えられている責務をまっとうすることです。京大山岳部は、残念ながら昨年9月に2人の部員を岩井沢の遭難で失くしました。京大学士山岳会には山岳部の卒業生が多数います。山岳部こそが母体となって人材を輩出し、京大学士山岳会の活動を支えてきました。そうした現役山岳部の登山をOBが支援し、必要な手を差し伸べるべきでしょう。つねに一步下がった位置から、現役の登山活動を助言し支援する役割があると思います。かつて京大は「探検大学」と呼ばれ、とりわけ京大学士山岳会はその登山・探検のフラグシップ（旗艦）としての役割を果たしてきました。その期待は今も変わりません。京都大学に最も永く残る84年の歴史をもつ山岳団体として、人々の付託に応える必要があるでしょう。「時報」や「ニューズレター」の刊行を通じて活動を発信します。そうして存続することで、過去から引き継がれた物の受け皿となることができます。メイリシュエシヤンの遺品はまだ氷河にいくばくか残って

います。過去の遠征隊の記録、過去におこした物事の責任を、法人としての覚悟をもって受け継いでいく必要があるのではないのでしょうか。

第三は、将来へ向けた継続するからです。これまで連綿とした人々の努力があったからこそ今日があります。「京都大学ブータン友好プログラム」という事業を松林さんと2人で2010年10月から実施してきました。この4年間で150名を超える京大の教職員学生をブータンに送り込んできました。今年9月には京大山岳部の現役5名とOBがブータンのトレッキングに行こうとしています。こういう活動を京大士山岳会の旗のもとに取り込んで、次の世代の人材育成をすべきでしょう。成果は、「ヒマラヤ学誌」（松林編集長）というかたちで世に問い、だれでもいつでも無料でPDFをダウンロードできるオープンアクセス化を果たしています。ホームページをぜひ見てください。<http://www.kyoto-bhutan.org/>

大学院生の育成プログラムとしては、京都大学リーディング大学院「霊長類学・ワイルドライフサイエンス」という事業を、京大山岳部長の幸島さんらと2013年10月から始めています。フィールドワークを基礎にした人材を育成するプログラムです。8つの実習のうち2つはフィールドワークの基礎を学ぶためのもので、笹ヶ峰ヒュッテの無雪期と積雪期の実習です。京大士山岳会としてそうした人材育成に関わる未来を考えています。ホームページをぜひ見てください。<http://www.kyoto-bhutan.org/>

京都大学総長は山極壽一さんです。学生時代はスキー部に在籍していました。山が好きで、

サルが好きで、東京の立川高校の出身ですが京都大学に来た、というパターンです。京大士山岳会の名誉会員になっていただくようお願いしたところ快諾をいただきました。来年の総会で正式に承認いただく手配です。これまでもヒマラヤ遠征のたびに京大総長が名誉会員になってきましたが、岡本道雄総長を最後に絶えて久しい状況でした。直訳すればAACKは京大士山岳会のはずですが、創設以来、「京都大学士山岳会」を正式名称としています。今後は京都大学との連携を密にして、京都大学らしい知的貢献を担える人材の育成を、当会としても担っていきたいと思います。

来年2016年は、日本がマナスルに登頂してから60周年を迎えます。5月9日に初登頂したのは、会員の今西壽雄と、ギャルツェン・ノルブです。記念切手の発行をよく覚えています。また、国民の祝日として「山の日」が制定され、来年8月11日からいよいよ実施されます。山の日制定協議会の副会長として微力を尽くしてきましたが、これをささやかに支援したいと思います。その一環として、去年は「雲南の山と自然」の写真展を松本市美術館と京大時計台で開催しました。今年は「ブータンの山と自然と文化」の写真展を11月から同様に実施します。そうした事業に協賛し、アーカイブ化した資料を活かすことを考えています。一言でいうと、齢は重ねても「それなりに」、という貢献のしかたがあるのではないのでしょうか。玄冬という時代を生き抜いていく法人の姿を示して、就任のご挨拶といたします。今後とも、なにとぞよろしくお願ひします。

松尾稔さん表敬訪問記

AACK 会長（当時）の松林公蔵が2011年9月14日、京都大学ブータン学術調査隊長を務めた松尾稔さんを訪問した。調査隊が撮影した多数の写真記録を預かるためだが、その席でブータンへの思いを1時間余り聞いた。貴重な証言なので以下に抄録をまとめた。写真はデジタル化し、同年10月に桑原武夫さんの長男文吉さんと松林の手でブータン王室に献上された。



コッペ（吉野熙道）から電話があり、松林さんが来るというので書庫を探し、スライドを見つけた。ブータンから帰国後、寄付のお礼にあちこちで講演をして回るため、留守本部の栗田靖之と横山宏太郎がそろえてくれたのが、がさっと入っている。『ブータン横断紀行』に載せた写真もある。これ以外にも克明に日記を付けた黒いノートがあるのだが、今回、見つから

なかった。

西堀栄三郎先生の『南極越冬記』は先生のノートをもとに梅棹忠夫さんが書いた。ブータンもその方式で、桑はん（桑原武夫）が「松尾のノートをもとに谷が書け」と言うていました。そうはいかんで、実際は松尾とコッペが書いたものを、谷泰さんが全面的に書き直した。僕らなら時系列的に書くだけですからね。

1969年2月、王妃が日本に立ち寄られるという連絡が外務省からあった。そのころみんな東京が大嫌いだったんですが、今西錦司さんに「誰か東京にチャンネルを持ってなあかん。松尾がやれ」と言われていて、外務省に情報源を作っていた。

王妃が伊丹に着く3日前に桑はんを訪ね、一緒にいってくれるよう依頼した。当時、日本学術会議副会長でとても多忙だったが、伊丹空港に行ってくれた。「日本に滞在の間、京大に（接待役を）やらせてくれ」とお願いした。このあたりのいきさつは桑原全集第6巻に書いてある。

それから1週間後、羽田を発つ際、「私（松尾）と私の隊をロイヤルゲストとして招待する」とホテルかなにかのペーパーに自筆で書かれたものをもらった。それでとにかく出て行った。ペーパーはどこかに大事に保管していたはずが、どこにあるか分からない。

ブータンではタシガンまでの旅行をよく許可してくれたと思う。ただ、北へ上がる許可は得られなかった。「私はシビルエンジニアだから、川をさかのぼって源流まで見たい」と言ったが、王妃はにこりと笑われて「あなたは川ではなく、山を見たいのでしょうか」とおっしゃった。それでもタシガンまで行けたのは一番の特例だった。

（タシガンからインド領を通り）プンツォリンに戻る際、リエゾンオフィサーは私に「一言もしゃべるな」と言った。私は黄色いゴを着せられ、ブータン人のふりをして、インド領経由で戻った。

私たちはブータンの教育面で貢献したいと考え、コッペとテンガイ（山本清司）を残そうとした。しかしインナーライン・パーミットが延長できず、果たせなかった。インドはブータンに外国人が入ることに神経質だった。

日本ブータン友好協会を作った後、桑原夫妻、西堀夫妻らとブータンを1週間ほど訪れた。



京大とブータンの関係について話す松林公蔵氏（左）と松尾稔氏

佐々木高明も一緒でした。東大の植物学者（原さん？）もいた。

私が AACK で一番若い理事だったころ、理事会で「ブータンに行きたい」と言った。錦さん（今西錦司）が「松尾が王妃にほれた言うてるやないか。近ごろ美しい話や。山は難しいけど、やればいい」と言われた。（調査隊を受け入れる利点として何を訴えたかと言えば）王妃にはインフラですね、豊富な水の活用と、最小限の道路を持たねば統一は難しいなどということ話をした。農業は西岡京治さんがやっておられるし。西岡さんの努力というか、西岡さんへの感謝は高かった。

AACK のブータン研究会には西夏文字を解読した西田龍雄さん（京大名誉教授）など、山登りではない人も入れてやっていた。あのころ幻の山だったガンケルプンツムも念頭にあった。ガンケルの写真を撮ったのは私たちが初めてだと思う。50 キロくらい離れたところから撮った。しかし、果たして公開してよいものやら、帰国後、議論があった。

当時のブータンは本当の意味で全国統一できていなかった。東部への旅行でも、王妃はリンジ大尉に「隊長をしっかり警護せよ」と命じていた。インドの兵隊もときどき入っている。方言も 200 ぐらいあり、それをなんとか統一したいと第3代国王が話していた。あまりにも方言が多いので、小学校教育に思い切って英語を取り入れ始めたころではないか。国づくりの始まりだった。

ブータン遠征隊の英語表記は「KUBM, Kyoto University Bhutan Mission」。登山とい

う文字を入れるとまずいだらうという判断が働いた。

当時、開発庁という組織ができた。役人とはいつも「発電所ができるか」という話になった。水力発電には適した国だが、しかし、その電力を何に使うかを先に考えねばならない。インドに売るにも、送電ロスがある。私は家内工業的なものを興しながらやればいいのではないかと考えていた。

写真を探していて計画の趣意書ができた。これを持って建設の方は私が、それ以外は桑はんの名刺を持って募金に回った。募金規模は800万円だったが、集まった。今思えばすごいお金だ。西松建設や関西電力など。自分の交際費から小切手を切ってくれた人がいた。10万円かと思ったら、100万円だった。日本が、やれやれどんだんの時代だった。その代わり、野生のランがあれば写真を撮ってきてほしいとか、いろいろ依頼された。ランプ（松田隆雄）とかが一生懸命撮っていた。

（ブータンへの貢献という点で）別の学者（AACK以外？）も集めて、もう少し幅広くやれば途切れずに続いていたかもしれない。京大

は山が先に来ますから。

私が助教授のときは海外に行くのは大変だった。土木の教室会議に桑原先生が「松尾を出してくれ」と言いこられて、石原藤次郎という工学部の天皇といわれた人が、「桑原さんみたいな偉い先生がここまで歩いてこられたんだから、松尾を出さんといいかん」と許可してくれた。

京大の中に友好プログラムができたのは喜ばしい。しかし、視点はあくまでブータンの視点でやるべきだ。自分たちの興味だけで進んではいけない。もちろん学者の集団だから、学問的成果をあげるのは大切です。京大の今西、木原均、梅棹から続く伝統はフィールドワークで、それを具現化しているのがAACK。フィールドワークに立脚して、今の途上国にどう貢献ができるかという視点でやってほしい。

ブータン友好協会も西堀さんか桑原さんが言い出したが、京大の人が続いていない。入会番号の1番から10番くらいで生きているのは私ぐらい。もう少し協力関係をとるようにすればよい。

（名古屋都市センターで、記録は榊原雅晴）

松尾さん偲び／1969年ブータン隊を語る

記録・榊原雅晴

1969年の京都大学ブータン学術調査隊長を務めた松尾稔さん（元名古屋大学総長）が5月9日に亡くなった。京都大学とブータンの友好に大きな足跡を残した松尾さんをしのび、松林公蔵・AACK前会長の呼びかけで6月5日、「京大69－71年隊と若手ブータン研究者の交響の会」（AACK・京大山岳部・京大ブータン友好プログラム主催、京大東南アジア研究所共催）が開かれた。第1部では、69－71年隊の関係者から、隊成立を巡る貴重な体験談を聞いた。第2部では、現在の若手研究者によるブータン研究が報告された。「交響の会」の模様を報告する。

第1部「京大69－71年隊」

■困難極めた入国交渉

栗田靖之（国立民族学博物館名誉教授）

1969年のブータン調査隊の留守本部をしていた。この隊はさんざん苦勞してブータンに行くことになるが、初めにその当時のバックグラウンドを話しておくべきだろう。

ブータンと日本の関係は探検部OBの本多勝一さんが1957年11月、ケサン・ワンチュク王妃が日本に来ていることを聞き付け、桑原武夫先生と芦田譲治先生が京都で王妃を接待した。そのとき中尾佐助先生（大阪府立大助教授）が「ブータンに行きたい」と申し出て、58年5月から11月にかけて6カ月間ブータンを訪問した。日本人として初めてブータンに行き、著書『秘境ブータン』（毎日新聞社刊）は日本エッ

セイスト賞を受けた。

59年にチベット動乱が起き、ダライ・ラマ14世がインドに逃れた。ブータンのドルジ首相が暗殺された。そういう時代だった。64年に中尾さんの大阪府立大の教え子だった西岡京治さんと里子さん夫妻が、コロombo計画の農業専門家としてブータンに派遣された。

47年に独立したインドは、ブータンが英国と結んでいたシンチラ条約を引き継いだ。インドは内政には干渉しないが、外交はインドの助言と指導に従うというものだ。その代わりにインド政府はブータン王国に毎年50万ルピーの援助を約束した。これが国の独立という点で、以後、ブータンを苦しめることになる。

そのような時代背景のもとに、京都大学にブータン研究会ができ、山岳部が中心に調査隊を送ることになった。1968年に山岳部長の小野寺幸之進先生が上田豊さんと市川光雄さんを連れて、1月と6月に1週間ずつブータンを訪れた。しかし長期滞在は許されなかった。

京大は学術調査隊を編成し、69年にブータンに送り込もうとした。総裁は桑原先生、秘書役に笹谷哲也さん、隊長に松尾稔さん、副隊長に吉野熙道さん。ブータンを西から東に横断しようという壮大な計画だった。

だが入国には大変苦労した。当時インドは国境をアウトラインと呼び、その手前5マイル(10マイルという人もいるが)にインナーラインを設けていた。インナーラインは外国人を通過させないという線。ブータンに入国するにはブータン政府からの招待状と、インド政府の通過許可証(インナーライン・パーミット)の二つを得る必要があった。

松尾隊の計画書をブータン政府に送っていたところ、69年1月24日に「許可しない」と通知があった。ところが69年2月にケサン・ワンチュク王妃一行が2回目の来日をされ、桑原先生、芦田先生、松尾さん、笹谷さん、西岡里子さんが接待に当たった。その場で王妃から「私の客人としてブータンに招待します」と返事をもたらした。すぐに入国できるだろうと69年8月に吉野がニューデリーに出発した。だが9月13日にインドの日本大使から「インドの許可が取れそうもない。京大に伝えよ」という思いがけない電報が届いた。それを受け、桑原先生と松尾さんがニューデリーに向かった。以後

40日にわたる交渉が始まった。

9月24日にブータン王妃から、ニューデリー滞在中の桑原、笹谷を1週間ブータンに招待するという通知をいただいた。9月29日に2人がブータンに入国し、インド政府に働きかけるよう要請した。当時のことを笹谷さんからうかがいたい。

■桑原武夫総裁の大演説

笹谷哲也(1969年隊秘書)

カルカッタでブータン外交を取り仕切っていたダゴ・ツェリンに(お願いではなく)懇願したが、らちがあかなかった。そこに王妃から「とにかく2人で来てくれ」と連絡があり、カルカッタからテレパラまで茶農園に新聞を配達する飛行機で向かった。農園に近づくと飛行機が傾き、開いたままのドアから新聞や郵便袋を蹴落としていた。

私がブータンに関係したのは宮木靖雅が68年ごろ、「ブータンから人が来ているから大阪を案内してくれ」と頼まれたことから。それがペマ・ワンチュクという林業関係の役人だった。

われわれがパロに入った次の晩、王妃が歓迎の宴を主催された。日本とブータンの酒の飲み比べをしようとなり、現れたのが大阪で会ったペマだった。節を抜いた竹筒にアラを満たし、1節ずつ焼酎を飲むと、みんながエンヤエンヤと踊り回る。踊りが終わると次の節まで飲む。2本目か3本目でペマがドスンと倒れた。私はかろうじて立っていた。まったくの無礼講だった。

ただ時間があると、本隊の入国のことばかりお願いするので、王妃は明らかにうれしい顔をされてなかった。

ティンプーでは今の王宮の3階の、中尾先生が泊まった同じ部屋に泊まった。国王に拝謁し、桑原先生が「京大の若い人が学術調査をすることは、いかにブータンの発展に役立つか」と大演説をされたが、長すぎて、国王があくびしたのを覚えている。3年後の1972年7月に国王は亡くなった。

インドに戻り日本大使館に報告したが、そのときの大使の態度は慇懃無礼から慇懃を抜いたような態度だった。「なにしに行った」という口調で、桑原さんはよく怒らなかったものだ。

ブータン入国の許可が得られたのは王妃と王妃のお姉さんが京都にお見えになったときのコ

ンタクトを非常に喜んでもらったことの結果だ。

桑原先生が30人目の外国人入国者で、29人が米国女優のシャーリー・マクレーンだったと聞いた。3年ほど前にブータンに行った印象では、大水力発電で労働力もインド、電気の輸出先もおそらく8割はインド、外交ではなく、経済で締め付けられているのではないかと思った。

栗田 笹谷さんがブータンで大酒を飲んでくれたおかげでインナーライン・パーミットが発給されることになった。10月17日のことだ。10月28日には松尾さん以下6人が入国した。第3代ジグミ・ドルジ国王に拝謁し、パロに2週間滞在した。11月14日にティンプーを出発し、12月4日まで21日かけて西から東に徒歩旅行をする。この隊の報告は米本さんから。

■ブータン東部への旅

米本昌平 (1969年隊)

私は一番下っ端の隊員として何か特技をもとと脅され、カメラを一式買い揃えてにわか練習をし、カメラ担当になりました。隊としてフィルム200本以上を撮ったことになっていますが、成果はすべて提出しろと言われ、手元にはほとんど残っていません。『ブータン横断紀行』(1978年、講談社)の多くは、私が撮った写真です。

田中達吉と2トン近い荷物とともに貨客船でマドラスに上陸し、1日半をかけて鉄道でデカン高原を横断し、コルカタのリットン・ホテルにつきました。ここでまる2か月間、足止めされましたから、学生ながらインナーライン・パーミットの取得がいかに困難か、伝わってきました。最後の手段として桑原武夫先生と笹谷氏が京都から乗り込んできて、強硬にブータン入りし、直接国王に働きかけた。その結果、やっと本隊の許可が下りた。コルカタからプロペラ機に乗り、インド側のテレパラで降りると、これから常に同行してくれることになる、王妃直属の武官リンジ大尉が待っていた。

同じ飛行機から精悍な感じの白人が一人だけ降りた。スイスの地質学者ガンサー (August Gansser: 1910 ~ 2012) だった。彼は、1983年に『Geology of Bhutan Himalaya』を著しており、ブータンの地質調査に着手したところだった。「お会いできて光栄です。ただ私たち

は1週間ぶんの許可しかないので」と言うと、「われわれはもう峡谷 (the valley) を越えたんだよ」とウィンクしてみせた。どうもこういう許可のとり方が対印関係の外交上の常道らしかった。

ブンツォリンからジープで2日かけてパロに入り、数日後、朝起きると王妃から全員のゴが届いていた。松尾さんだけはスーツだったが、他の隊員はゴを着て王妃に拝謁した。



「1回だけなら」と許可を得て撮影した王妃との拝謁写真

カメラ担当としてどうしても写真が撮りたくて、執事を介してお聞きすると、1回だけなら、と王妃の許可が出た。そのワンチャンスがこの写真で、左から第三王女、ケサン王妃、西岡夫人、松尾隊長である。このとき、第三王女のすぐ上の皇太子 (先代国王) は15歳で、人前に出るのを嫌って遠くで一人遊んでいたのを覚えている。

謁見の冒頭で、王妃が「(公式のインビテーションを口頭で幾度か、そして正規の手紙も出したのに) みなさんにここまでご苦勞をかけ、恥ずかしく思います (I am ashamed)」とおっしゃった。私は強いショックを受けたと同時に、ブータン=インドのただならぬ関係がうかがわれた。それから数日後、王妃は、われわれのためだけに特別にマスクダンスの宴をもたれた。

■ブータン人装いアッサムを通過

われわれは少しでもブータン・ヒマラヤに近づきたかったが許されず、国王が示したのはトンサまでの調査旅行で、われわれに選択の余地はなかった。東ブータンの旅は、ワンデュボダンまではジープで、あとは徒歩で、実働2週



左から米本昌平、(1人置いて)田中達吉、松田隆雄、松尾稔、リンジ大尉、山本清司、(1人置いて)吉野熙道の各氏(自動シャッターで撮影)

間の予定だった。ほぼ予定通りだったが、荷物を運ぶ馬の手配が大変だったようだ。建設中の東西横断道路の脇をしばしば歩くことになったが、成果は何とんでもブータン・ヒマラヤの最高峰ガンカールプンツムを初めて写真に収めたことである。『ブータン横断紀行』の日程の部分は、松尾隊長の詳しい日記が基本になっている。タシガンからの帰路は触れないことになっている。しかし実際には、タシガンからサムドゥルジョンカールという国境の町までジープで行き、ここで1泊した。そこからまる1日ジープをブッ飛ばして、インド側のインナーラインのアッサム平原を疾走し、夜にブータン側のプンツォリンに滑り込んだ。どうもこれは当初からの計画だったようで、同行のリンジ大尉が「黙っていればブータン人にしか見えない、絶対に大丈夫だ」と言って、われわれに無駄口をたたかないよう釘を刺した。途中で3か所ほどチェックポストがあったが、大尉は「これは王族の方々だ」と説明したようでフリーパスだった。途中でブータン側に逸れて、マナス王立動物保護区で一休みした。

入国の時はパロまで2日かかったが、今度は1日で着いた。戻ってみると、パロ空港が滑走路だけでできていた。王妃と第一王女、第二王女が避寒のためにコルカタに行かれるので、チャーター機が用意されていた。これに便乗させてもらい、パロから直接コルカタまで帰ってきました。

栗田 帰りはブータンの南側を、アッサム地方を通過して帰ったとのことであるが、今でもこの辺りは外国人が自動車でごぶごぶ飛ばしてはいけ

この隊は2人をブータンに残し、長期滞在して調査をしようという話だった。吉野熙道は農業指導、山本清司は教育をしようとした。だがどうしても許可は得られなかった。1カ月後に2人はブータンを出国した。

これで京大のブータンへの学術調査の道がついたというので1970年に私と家内が、71年に西山孝さん夫妻がブータンに行った。これで京大とブータンは太いパイプで結ばれたと思って71年7月に谷泰さんと河合明宣さんが入国を試みた。コルカタ、ニューデリーで53日間、インドにとどまって交渉したが、ついに入国許可が得られなかった。そのへんの事情を河合さんに。

■入国ならなかった1971年隊

河合明宣(1971年隊)

市川さんや米本さんが帰ってきたころは、パイオニアワークだと言って、学術と地理的探検が盛り上がっていた時代だった。私はラッキーなことに3回生だった71年7月に同回生で最初に外国に行く機会を得られた。農学部ということで西岡さんのお手伝いで残ればよいと言われた。

7月14日に出国し、コルカタに行った。コルカタにはブータン政府のState Trade Corporation of Bhutan (STCB) という貿易関係の施設があった。ニューデリーにはインドの内務省があり、ブータンの代表部もあった。

私が先に行って交渉をしていたが、農業関係だから製材機をもっていった。いろいろお土産も必要だった。代表部にはコピー機械や、皇太子にはオートバイに乗るのでヘルメットとか皮の手袋とか。背広を着てピッケル持って登山靴をはいてザックをしょって初めての飛行機に乗って出かけていった。香港で乗り換え、そこで笹谷さんにお世話になった。

STCBに何度も通い「まず王室から許可をもらってほしい」「インナーライン・パーミットをもらってほしい」と言われた。木村雅昭先生が外務省の調査員としてニューデリーにおられたので連絡を取り大変お世話になった。当時は国際電話をかけるのに半日以上待つ。文書が紛失するので、手紙にはナンバーを打つ。緊急の場合はテレックスでという時代だった。

7月29日に谷さんがコルカタに到着されたが、入国許可は、なかなかうまく行かず二人で8月3日にニューデリーに移り、ブータン代表

部のダゴ・ツェリンに会ったりした。結局、8月28日にロイヤル・ブータンミッションから「今回の訪問は不可能だ」と電話があった。木村先生にいろいろな形で連絡を取ってもらったが、日本大使館は「行ってほしくない」という印象だった。それを受けて谷さんは先に帰国した。そのころ西山先生ご夫妻と、小方全弘さんが入国した。お2人に「ブータンに入ったら、河合のインビテーションを頼んでくれ」とお願いしたが、だめだった。

その後、OBの入江洋四郎さんがネパールに入国し、一緒にエベレストベースキャンプやダウラギリを歩いた。松田隆雄さんもヤルンカンの許可を得るために来ていた。ブータンには行けなかったが、地理的空間と学術的空間におけるパイオニアワークに対するOBの執念とか、後輩への思いやりをいたく感じた。

■燃え尽き症候群？

栗田 1969年の松尾隊は帰国後、燃え尽き症候群になってしまい、報告書を出さなかった。松尾さんの膨大な日記と、吉野さんが資料を持って帰っていたので、谷さんが編集したのが『ブータン横断紀行』である。締めくくりとして谷さんからお話を。

谷泰 (1971年隊) 確かに僕が編集したが、全然覚えていない。だから松尾さんのことをお話しする。松尾君は私の後輩で、私が3回生のとき、私と松井敦男(?)、松尾で穂高の岩登りに行った思い出がある。

彼は口の悪い男で、私とよく口げんかした。土木で粉体力学をやっていたが、粉体といっても泥でした。「なんやお前、泥をやっているのか」という具合でした。彼がブータンから帰ってからこんなことを聞いた。王妃から川に大きなダムをつくる計画について聞かれた。「いくら大きなダムをつくってもそれを消費するものがなければ意味がない。電力を使うような、中小の手工業のようなものから順番に産業を興していく。ステップバイステップだ」と対応したようだ。

■インナーラインのくびきが解かれる

栗田 1981年に桑原先生は日本ブータン友好協会をつくられ、ブータンに行った。皇太后となっていた王妃と4回目の面会をされた。皇太后は「桑原先生は私の日本での父親」とおっ

しゃっていた。

その後のブータンはどうなったか。1983年にネパールと国交を持つ。つまり独立国として承認されたということ。83年にドルック・エアがコルカタ〜パロ間に就航、7人乗りの小さな飛行機だが、これが飛ぶことでインナーライン・パーミットのくびきから解放された。自分の好きな外国人を自分の飛行機に乗せてブータンに連れてこられるようになった。それが1985年の山岳部のマサコン登頂につながった。2010年から京都大学ブータン友好プログラムが続いている。

(写真を示しながら) 2011年のこの写真は第5代国王の結婚式典のものである。第5代国王は日本を訪問され、たった一晩ですべての日本人がブータンを大好きになる演説をされた。皇太后は83歳でご健在である。ここに写っているのは谷さんと河合さんとのタフな交渉相手であったダゴ・ツェリン。桑原先生のご令息の文吉さんと一緒に映っている。締めくくりに言いたいことは、ブータンと京都大学の関係は、それぞれの分野でお互いの信頼関係を築こうとした人びとの歴史だったということだ。



左からケサン皇太后、ダゴ・ツェリン、松林公蔵、桑原文吉の各氏 (2011年10月15日)

◇第1部の報告者

趣旨説明：松林公蔵 (京都大東南アジア研究所教授)
報告者：栗田靖之 (国立民族学博物館名誉教授)、
笹谷哲也、米本昌平 (東京大学客員教授)、河合明宣 (放送大学教授)

質疑応答では西山孝 (京都大学名誉教授)、上田豊 (名古屋大学名誉教授) からも発言があった。

◇第2部「現代の京大ブータン研究」発表項目

「ブータン高齢者ヘルスケアデザイン」＝坂本龍太
(京都大学白眉センター助教)
「ブータン仏教研究」＝熊谷誠慈(京都大学こころ

の未来研究センター特定准教授)
「院生としてブータンを訪ねて」＝谷悠一郎(京都
大学農学研究科修士課程)

度量と明るさ

米本昌平

1969年隊京都大学ブータン学術調査隊は、工学部土木工学科助教授の松尾稔氏が隊長となったこと自体、山岳部の伝統に照らして異色の隊であった。それまでの遠征隊の募金とは別のルートを期待しての隊長就任であることは暗黙の前提で、不況といわれた中、松尾氏の実力で目標以上の募金額を達成した。だが、インド側のインナーライン・パーミットがなかなか下りず、コルカタで全員が足止めを強いられていたとき、松尾氏は「もし入国できなければ責任をとらなければならないだろう」と漏らされていたのを覚えている。

2000年10月に、旧・科学技術庁が「21世紀の社会と科学技術を考える懇談会」を発足させたが、この時、名古屋大学総長だった松尾氏と30年ぶりにお会いし、委員として同席した。「おーい、ヨネ、元気やったか！」と、底抜けに明るい声が私の席まで飛んできた。なぜ二人がこんなに親しいのか、周囲は怪訝な目で見ていた。

調査隊の折には、私は余計なことで松尾隊長をいろいろ煩わせてしまったが、結局、松尾氏の度量の深さに一方的に甘えてしまった。

黙してご冥福を祈るばかりである。

ブータン 1969 とネパールの再訪

田中達吉

「私たちは単に好奇心や冒険心の満足のためにブータンをのぞきに行こうというのではなく、文化的にも日本と大変親近性があると考えられるこの兄弟国の発展をこそ望んでいる、だから訪問させていただきたい…」松尾稔さんが訪日中のブータン王妃に語ったことばである。日本人が出かけて行ってブータン国の発展に寄与するという事は、まさにシビルエンジニアの発想であるが、狭量の私には山しかみえなかったため、登山とは別世界の話のように感じると共に、「入国許可を得るための方便か」と穿った考えをもったりした。しかしこの言葉に強い感銘を受けられた王妃から招待状をもらい、ブータン行きが現実のものとなってきた折、吉野コッペさんと山本テンガイさんがブータンにしばらく残留し教師としての役割を果たすという決心をされ、その本気度にあらためて驚かされ、また、現地で農業指導に当たられていた西岡京治さんにブータンでお目にかかり、決意とその実績に頭が下がる思いであった。あれから45年、日本は海外から資金援助を受ける国

から途上国へ資金・技術協力を実行できる国に発展した。日本外務省のブータン国に対する援助方針では次のように述べられている。「ブータン国は一貫して親日国である。西岡京治専門家の多大な貢献が両国間の友好関係の礎となっている。我が国のODAは両国間の良好な関係の維持・発展に大いに役立っている。」…これは、まさに松尾さんが半世紀前に述べられたことの実践が国を挙げて行われていることに他ならない。

ブータン中央部の横断旅行は1969年11月14日にパロを出、12月9日に帰着するまで26日間の旅であった。我々は王妃の招待客という国賓待遇で、旅行には王妃から手配された軍人やコックが同行した。私は少しガサツな人物と思われていたようで、旅行中にたびたびご指導をいただいた。例えば、峠越えの際には山を見たいので道からはずれて尾根沿いに登って行こうとすると制止され、岩石サンプルを採取しようとして動くともこれまた制止されるという様子で、常時監視の目があって少々堅苦しい旅でも

あった。旅行を終え、パロで数日すごしたのち、吉野さんと山本さんを残して、12月17日にカルカッタ・ダムダム空港に戻ってきたとき、ガンサー教授(チューリッヒ大学地質学)に出会った。これからブータンに入るというところ。5回もブータンを訪問し、中国国境近傍まで入ることをゆるされている数少ない外国人である。地質の情報はブータン国にとって大変有用であるという国王のお考えでサポートされていた。私は Mountain World 等の雑誌で教授のブータンルナナ紀行などを読んでいたので、少し話げできたことは喜びであった。

その後、私と米本ショウヘイさんは鉄道を利用してカルカッタから国境の街ルクソールまで、その先はトラックにてネパール国に入ってカトマンズに12月22日に到着。松田ランプさんと合流して12月30日にマナスルトレッキングルートの小旅行に出発した。ランプさんの友人であるシェルパのミンマが案内に同行した。このルートは現在でも多くの人に使われており、カトマンズ盆地から西へ進みアルガートバザールを経てブリ・ガンダキに入りそのまま上流へ向かいラルキャ・ラ(5160 m)を越えマルシャンディ川に至るもので、マナスル山群を一周する。私たちは真冬だったので、ラルキャ・ラ越えは計画せず、ブリ・ガンダキを途中で折り返しマナスル山群の南側を迂回するルートとした。途中、バルバクという村から北へ上がりヒマルチュリの南側の小ピーク(6000 mクラス)の氷河に取り付いてみた。もともと高山用の食料が3日分しかなかったので、その範囲内での行動を考えており、4800 m程度



写真1 氷河の上、左からショウヘイさん、筆者、ランプさん

の氷河の上を最高到達点として下山した。それでも初めて氷河の上を歩く経験をして、強い興奮を覚えた記憶がある(写真1)。下山後は田舎道をのどかに歩き、茶店を見つけてはロキシーなどをいただきながらポカラに着いたのは1970年の1月29日、ちょうど1ヶ月のトレッキングであった。ランプさんのネパール滞在の目的はヤルカン登山許可を得るための交渉を進めることにあったにもかかわらず、時間を割いて私たちを連れてポカラまで付き合っていた。ブータンの旅はそれなりに緊張した旅であったが、ネパールはリラックスして味わいの深い旅であり、ランプさんの指導によるものと感謝している次第である。

2011年に42年ぶりに訪れたネパールは、水力発電所建設に関わるエンジニアリング業務目的であった。ポカラの南東約50 kmに位置するダマウリという街(標高300 m)を基地として毎日山道をダムサイトまで歩き、現地の地質を調べる仕事が私の担当。ネパール電力会社のマネージャーや技術者に会おうと「ネパールは初めてか?」という挨拶から始まる。「2回目である、以前来たのは40年前だ」というと皆一様に驚く、彼らの年齢は40歳前後である。前のネパール小旅行時のエピソードを話すると自分たちの生まれたころのネパールを知っているということで大うけに受けた。彼らと共に現場の仕事を実行した季節は雨季の真ただ中、6月末には3日間大雨が降り続き、水田は川になり、道路は土砂で埋まり、山道は斜面からの巨岩転石、ダムサイトは水かさが10 mも上昇するといった状況。全国で水害による死者が9名という報道もあった。ネパールに来て、雪の高山を全く望むことができないというフラストレーションの毎日。そこで知り合ったのがネパール人のシビルエンジニアであるJ君。地質調査のための試掘トンネル掘削の現場監督である。このトンネルを掘削するための機械器具を道路もない山の中にどのように搬入するのかと聞くと「すべて人力。大きな機械は分解して一個あたり200 kg程度の重量のものにし、これを2本の竹に括り付け、神輿のようにして4名から6名で担ぐ、アプローチの道は自分たちで作った。」現地はまさに左右岸が迫ったゴルジュ地帯で極めて急峻である。そこに機材を担いだ人が通れるような道をどのように作ったの

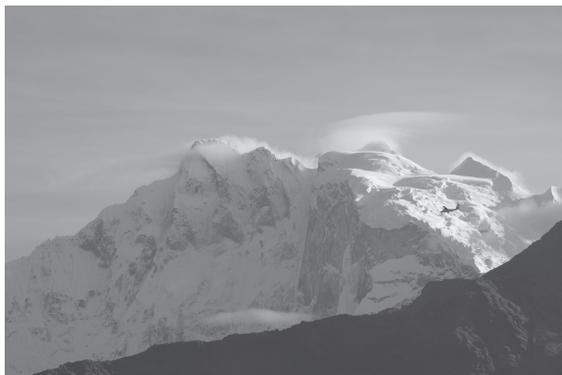


写真2 アンナプルナ主峰をバックに飛行するポカラ発ムスタン行き定期便



写真3 ダマウリの街とマナスル三山(左よりマナスル、P29、ヒマルチュリ)、川はセティ川

かが気になり「ルートファインディングが重要と思うけど、Jさんはいかにして道を作るルートを決めたのか？」などと話しかけて受け答えしているうちに打ち解けた。トンネルの技術者は途上国では大変珍しく、地質のことも考慮した掘削を心がけているJ君はかなりのレベルに達しているエンジニアであると見られた。トンネル掘削中に切羽が崩れて大きな問題が発生した時も、落ち着いて対処、ショットクリート工法に必要な機材を人力にて担ぎあげ、慎重に実施してクリアするという技を見せてくれた。機材の運搬は男性のみならず女性も多く参加し、ビーチサンダル履きで山道を担ぎあげ、山岳民族ネパール人の底力を見せられた思いである。40年前は裸足だった。

9月になれば雨季も終わりヒマラヤの高山を眺めることができるだろうと考え、9月中旬に4日間の休暇を取ってゴレパニまでのトレッキングを計画した。ガイドを雇いポカラを出発、一日目は標高1500mの村で宿泊し、2日目は雨の中を3000mのゴレパニのロッジまでフラフラになりながら登り、「このルートは二度と来ない、しんどすぎる」との思い。その夜は大雨がトタン屋根を打つ音で目が覚め、暗澹たる気持ち。朝4時、窓から月明かりが差し込むのに気が付き、少し晴れているようだ、この一瞬しか山が見えないかもしれないとロッジの外に出るが、まだ暗い。月明かりに白い巨大な塊がぼんやりと見え、まるで頭上から覆いかぶさってくるような迫力であった。明るくなってわかったが、この山はアンナプルナサウス(ガネッシュ峰)であった。

5時にリヒトを点けてプーンヒルへ400mの登りにかかる。天候は回復しつつあるようだ。日の出前に到着、周囲が少しずつ開けるように雲が移動し、いよいよヒマラヤの大パノラマが出現した。ダウラギリ連峰、ニルギリ、アンナプルナが一望。なんとという幸運。2時間ほどは陽の光による色彩の変化を楽しむ(写真2)。雨季のイライラを吹き飛ばすビッグビューであった。

12月になると大気も安定し、低地から高峰がよく見えるようになってきた。雨季のころに比べると山の雪は少なくなっている。ダマウリの街からもアンナプルナ連峰やマナスル連峰が見え、現場に行くのが楽しみになる(写真3)。

山を楽しみながらのネパールの仕事は終わりに近づき、J君が別れの際に私に詩を贈ってくれた。彼は詩人で現場でもよく詩を詠み披露してくれた。「タナカさんあなたは、ネパールの岩を砕きも破壊もせずまるで名医のように検査し、扱った!! タナカさん、あなたの足あとは——ずっと続く道に永遠に残っていく、あなたの大きな影は——森の中に見え隠れする…」というような内容である。現場作業が終わって作業員と共に打ち上げパーティを開く際、近所の農家で羊を一頭解体してその糧としたが、J君はその気持ちを次のように詠んでいた。

「ハイ、羊さんよ、おれはこれからお前の首を落とす。

我々が事故なく無事に仕事を終えることができたことをお祝いしたいからである。

そのためにお前の命をいただきたい。

お前は間もなく命をなくすだろう、そして私は悲しみ涙を流して泣くだろう。

その涙は川にまで達するだろう、そして川に棲む生き物もお前のために涙するだろう。我々の小さな記念品として、お前にメダルをあげたい。

でも不幸なことにお前にはメダルを掛ける首がない。

だから私は針をあげるの、それで首を縫い付けてくれ。」

といった調子で、やさしい心とユーモアを持ち合わせた友であった。

ネパールには再訪を果たしたが、ブータンは1969年以來訪れていない。大きく様変わりしている様子などを訪ねてみたいがそのチャンスがあるでしょうか？

第33回雲南懇話会(2015年6月27日開催)、その講演概要

前田栄三、山岸久雄、安仁屋政武

第33回雲南懇話会は、2015年6月、東京市ヶ谷のJICA研究所国際会議場で開催され、105名の参加を得て、盛況裡に終了しました。以下、講演の概要を紹介致します。

1. 「積雪期の知床半島縦走、2013年2～3月」 —近年の山岳部活動の様子も紹介！—

同志社大学山岳部(当時4回生) 山口 尚紀
(当時3回生) 齋藤 慎太郎

2013年2月下旬～3月、同志社大学山岳部は知床半島の主稜線を縦走し、断崖が続く南東側海岸線を踏破した。リーダー小谷が知床縦走を構想して6年後、幾度かの偵察と、輪カン・雪洞・イグルーの経験を積み、実行に移した。厳しい風とハイマツ地獄に苦しめられた12日間の報告(報告者は山口君)である。齋藤君から自由闊達な日々の活動内容が紹介された。同大山岳部は現在、部員数20名とのこと。山岳部のブログには、毎年の入部者数も堅調に推移し各回生間のバランスもよく保たれている様子が記録されている。躍動する大学山岳部の存在は、素晴らしい! その点こそ、講演をお願いした原点である。

【参考】「流水～知床岬から縦走、1971年3月」

京都大学山岳部(当時3回生) 山岸 久雄
京大山大岳部の1971年3月の流水原踏破～知床の山々の縦走の記録と共に、1952年12月の厳冬期に知床岬より知床岳間の初縦走に成功した時の記録も、参考情報として簡潔に紹介された。1952年(昭和27年)当時の登山装備は現在と比べると大変貧弱であり、厳冬期知床の厳しい寒冷環境にどう耐えるかが極めて重要な課

題であった。この山行はヒマラヤに挑戦する為の極地法や装備、食糧の研究とともに、国内での冬季初縦走というパイオニアワークを併せた計画であり、その後のAACKのヒマラヤ登山活動にも寄与することの多い、すこぶる収穫の多い山行であったことが、語られた。

2. 速報「地震直後のネパールランタン谷報告」 大阪市立大学山岳会 片岡 泰彦

「大阪市大はランタン谷には縁が深く、日本隊最初のヒマラヤ遭難は当山岳会の[ランタン・リルン]に始っており、ここ5年間『市大ランタンProject』としてランタン谷へ登山隊を派遣してきた。今年は最奥の「ランタン・リ」の登山中に今回の地震に遭遇した。」と前置きし、地震直後のランタン谷の状況写真を紹介された。会場のスクリーン一杯に映写された秀麗なランタン・リ山頂&山容、その地震直後の変貌ぶりが痛ましく、ランタン谷全域の被害の甚大さを象徴しているように感じた。10分間の速報であった。

3. 「ブータンにおける学校教育の歴史の変遷」 —学校教育100年史—

早稲田大学教育・総合科学学術院
教育総合研究所助手 平山 雄大
「ブータンにおける近代学校教育の誕生はおよそ100年前まで遡ることができる。1950年前後からは一般に開かれた学校教育が行われ現在に至っているが、特に先行研究や史資料が乏しい1990年代以前の状況に関しては不明点が多く、その詳細を描出することは難しい。」と

述べ、同国の近代学校教育史を「黎明期」、「草創期」、「拡充期①」、「拡充期②」に分け、新情報を交えその変遷を概観された。インドを始めとした諸外国で医学や工学等の教育を受ける際に最も都合のよい言語として、50年前から、英語で授業が行なわれているという。

4. 「中央アジアの山国 タジキスタン、美しき自然と暮し」—パミールの遺跡を中心に— 長距離サイクリスト、日英会議通訳、 パミール・中央アジア研究会理事

井手 マヤ

演者は、2005年以來ワハンを含めタジキスタンを7回旅行し、パミール各地の遺跡を視察されたという。19世紀以降ワハンを通過した探検家は数多くいるが、第2次大戦後のソ連時代までに古代遺跡を調査したのは、僅かに1890年代のオルフセン率いるデンマーク隊とハンガリーの考古学者オーレル・スタインのみのこと。今回は、主にデンマーク隊とスタインの報告書、及びご自身の現地視察に基づき、ワハン及びタジキスタン領パミールの遺跡を中心に紹介された。

タジキスタンを訪問したことのある人？との講師の問いに、拳手した人は皆無に近い印象を持った。それに引き換え、新疆ウイグル自治区を訪問したことのある人の拳手は、多数であった。

5. 「納豆の起源」—照葉樹林帯を横断、納豆文化の多様性を追う—

名古屋大学大学院環境学研究科教授
横山 智

「多くの日本人は、ネバネバと糸を引き、独特の臭いを放つ納豆は、日本の伝統食だと思っている。しかし、1970年代前半に、納豆は東南アジアやヒマラヤでもつくられていることが『照葉樹林文化論』で示された。また中尾佐助の『料理の起源』(NHKブックス)では「納豆の大三角形」という説が提示され、納豆は中国雲南省で発祥したと論じられた。ところが、その後、納豆の起源を探る学術的調査は全く実施されていない。」と前置きされた。2000年冬にラオスで出会った「トゥアナオ(腐った豆)」をきっかけに、これまで謎とされてきた東南アジアとヒマラヤの納豆文化の広がりや、多くの

写真やデータを示しながら紹介し、納豆の多元起源説を提示するに至った過程を語られた。2014年11月、『納豆の起源』を著わし、NHKブックスから出版されている。

6. 「東南アジアの環境変動とサルの進化」 —500万年の化石記録を読み解く—

京都大学霊長類研究所教授、AACK
高井 正成

ミャンマーと中国南部の1500～200万年前の化石相(イラワジ層)は、従来、インド亜大陸のシワリク化石相との類似性が高いことが知られていたが、京大霊長類研究所がこの地域で行っている鮮新世～更新世(約500万～15万年前)の陸棲動物化石の発掘調査によれば、約500万年前からシワリク相との類似性が低下し、東南～東アジアとの類似性が増加してきたことがわかった。これは、横断山脈を含むヒマラヤ山脈の隆起と、それに伴うヤルツァンポー河などの流路変化が、この地域の動物相の変化に影響を及ぼしている可能性があることなど、東南アジアに生息する霊長類の進化史と、その背景となっている環境変動について、語られた。

第34回雲南懇話会のお知らせ

1. 日時; 2015年10月03日(土) 13時00分～17時30分。茶話会; 17時30分～18時40分。
2. 場所; JICA 研究所国際会議場(東京・市ヶ谷)
3. 懇話会の内容<講師、演題、講演の順序など変更ある場合は、ご了承をお願い致します。>

① 「アマゾン先住民の文化と暮し」
—シングー国立公園及びその周辺地域の開発について—
NPO 法人 熱帯森林保護団体代表 南 研子

② 「ネパール・ランタンプロジェクト、OCUAC」
—ランタン谷と峰々に魅せられて、夢の途中—
大阪市立大学山岳会、
2015年ランタン・リ(7205m)登山隊
兵頭 渉

③ 「ブラジルの茶園・茶産業」
—日系移民の開拓の歴史—
ティー・リテラシー、茶道家 上原美奈子

④ 「アンデス山脈の家畜と祖先種、そしてジャガイモ」

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科
准教授 大山 修一

⑤ 「南米・パタゴニア氷原—30余年の調査の軌跡」

筑波大学名誉教授（雪氷地理学）、AACK
安仁屋政武

図書紹介

寒冷の系譜

北大山岳部九十周年記念海外遠征史 1926～2016
北大山の会、2015年5月31日発行、401ページ 別添：DVD（3枚組）
北大山岳部創立90周年記念 映像で見る海外遠征史

横山宏太郎



表紙を見るだけで、昔に戻ってしまうようだ。山岳部現役時代、北の山へのあこがれを胸にくりかえし開いた北大山岳部部報の、あの表紙。そして開けば当時のあれこれが蘇ってくる。

これは、本年発行された、北大山岳部九十周年記念海外遠征史「寒冷の系譜」。B5判で401ページ、ずっしりと重い。さらに、映像記録として3枚組のDVDが添付されている。

北大の人たちは、明治時代末に我が国に伝わった新しい技術であるスキーを利用して、まだ地図もない雪山に分け入り始めた。1912年（明治45年）には北大文武会スキー部が創立され、北海道中央高地の山々の冬期初登頂がなされていく。そして1926年11月、北海道大学山岳部が創立される。

以後、北大山岳部と、そのOB組織である北

大山の会は、北海道の山々の開拓・初登頂に始まり、ダウラギリ冬期初登頂（1982-83）をひとつの頂点とする「寒冷の系譜」を紡いできた。本書は、90年にわたるその歴史を、海外遠征を中心にまとめたものである。章立ては以下のようになっている。

通史 海外遠征の視点から見た北大山岳部90年の軌跡
第一部 証言—その時代
第二部 北大山岳部の海外遠征
第三部 北大山岳部の海外学術調査活動
第四部 北大山岳部のルーム
資料 北大山岳部・山の会 海外遠征年表

「通史」では、副題の通り、海外遠征の視点から見た北大山岳部90年の軌跡を語る。まず「寒冷の系譜」と題して、「北大山岳部には創立当時、その前夜の時代を含めて、登攀行動の潜在的志向として『寒冷の系譜』という流れがあると仮定し、その発端、形成の過程を実際の山行記録の中で考察することによって」スキー伝来からダウラギリまでの歴史を俯瞰する（渡辺興亜）。続く「ダウラギリ後の30年史」は第二部第三章の「概要」とあわせ、ある意味困難な時代から将来を見据える（米山悟）。

第一部では、「探検の時代（1926～1969）」「ダウラギリの時代（1970～1983）」「ポスト・ダウラギリの時代（1984～現在）」と時代を区分し、それぞれの時代に活躍した人たちへの貴重なインタビューと座談会で構成され、時代背景

や考え方がよくわかる。

第二部でも、おなじく三つの時代に分けて、1962年のチャムラン峰（ネパール）に始まるAACH（北大山岳部・山の会）の海外遠征の記録が続く。「探検の時代」、チャムランでは、外貨割当てでAACKのサルトロカンリ隊と競合して苦労があったらしい。現役時代の筆者の印象に残っているのは、1963年のナラ・カンカール隊である。目的の山が見当たらず、調査のなかで越境して中共軍に捕まったという話（宮地隆二）は、現役当時、その記録に接し、なんと面白いことをする人たちだろう、と思ったものである。そんな探検的登山は、私達にとってひとつの夢でもあった。AACHが中心となった、南極観測に向けたカラフト犬（犬ソリ）の訓練も紹介される（安藤久男）。

「ダウラギリの時代」、実質十数年という期間、マッキンリーに始まり冬期トリスル（撤退）、ドレフェカル、クンヤン・チッシュ北峰、そして冬期のバルンツェと次々に登山隊を送りだし冬の8000m峰登頂に向けて進む姿には、強い勢いを感じる。中核隊員は、筆者と同世代から数年若手までの人たちで、友人・知人も多く、その活躍に少し羨望の混じった感動を覚える。「寒冷の系譜」は、冬期ダウラギリで一つの頂点に達したと言えるだろう。

「ポスト・ダウラギリ」では、対象と方法の選択に自由度が増したことによって、ヒマラヤの小規模隊、各地の大岩壁、カムチャツカ、台湾など、様々な地域・登り方への展開も興味深い。

第三部では南極とヒマラヤを中心に、AACHが輩出した多数のフィールドワーカーの活躍が述べられている。また第四部では、心のよりど

ころともいえるルームの変遷が語られ、1994年に完成した北大山岳館が最後に紹介されている。

残された映像記録は実に1380時間におよぶというが、およそ十分の一に編集して、3枚組のDVDに収められている。3枚は、三つの時代に対応する。チャムランは動画があり、ナラ・カンカールは静止画とナレーションであるが、50年以上前の貴重な映像を見ることができる。最近の登山までを含め一覧できる映像記録は、ほかに例がないのではないだろうか。

じつは本書は、さきに映像データのデジタル・アーカイブ化を進めていたところ、「映像だけでは表現できないそこに集まった人たちの背景、決断、思いなどに多角的に照明をあてて、遠征史という形に残しておく（中村晴彦、編集後記）」ことに発展した、という。両者あわせて「寒冷の系譜」のまさに集大成がなったことをお祝いし、出版委員会をはじめ関係各位に拍手をおくりたい。

「北」はその中に「未知」を含んでいるようにおもえるのだが、「寒冷」という厳しさを加えてさらに魅力を増すのではないか。北大、AACHで活躍した人たちの中には、京都をはじめ関西の出身者も多い。北大と京大、地理的に離れてはいるが、山をめざす者の心には同じ未知への志向が流れているように筆者は感じている。本書をAACKの皆さんにもおすすめしたい。

本書は、DVD付き・送料込みで5,000円。AACHウェブサイトから申し込みができる。

<http://aach.ees.hokudai.ac.jp/xc/modules/Center/activity/90th/>

AACK ニュース

会員田中二郎氏が「大同生命地域研究賞」を受賞

2015年7月15日、2015年度「大同生命地域研究賞」(大同生命国際文化基金)に田中二郎・京都大学名誉教授が選ばれました。アフリカの狩猟採集民研究と地域研究への国際貢献が評価

されたのが授賞理由である。

大同生命国際文化基金

<http://www.daido-life-fd.or.jp/>

会員動向

編集後記

猛暑の夏から、一転して秋雨前線の活発な8月後半になりました。皆様この夏はいかがお過ごしでしたか。

8月初めに、ほんとうに久しぶりに、火打山に登りました。ちょうど休日でもありましたし、なかなかの賑わいでした。老若男女を問わず人気があるようです。

十二曲の途中からは白馬岳をはじめ後立山連峰とその奥に剣岳の頂上が見え、富士見平からの富士山を期待したのですが、灌木が繁ってしまい、見えそうにありませんでした。大昔、中学生の頃には確かに見えたはずなのに、残念でした。

頂上近くの植生復元は、だんだん成果が見えてきたようです。関係者の長いあいだの努力には頭が下がります。

北大山の会(AACH)の「寒冷の系譜」を紹介しました。私は南極、雪氷、ネパールなどのご縁から、AACHの方々とのおつきあいが多いほうではないかと思えます。AACHの方に見ていただいたDVDブック「カラコルム／花嫁の峰チョゴリザ(2010年)」が、「寒冷の系譜」

のヒントになったらしいので、うれしく思っています。

また予定より少し遅れてしまいました。第74号を発行することができました。原稿をちょうだいした皆様、ありがとうございました。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2015年10月16日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日	2015年8月31日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 竹田晋也 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町1-8 (株)土倉事務所